



京都大学 防災研究所
Disaster Prevention Research Institute
Kyoto University

特定研究集会
2022C-03

災害復興研究におけるスペシャルトーク・セッション

Special talk session on disaster recovery and revitalization research

令和 5 年 5 月

May, 2023

研究代表者 矢守克也
Coordinator Katsuya YAMORI

実施報告 特定研究集会（課題番号：2022C-03）

1. 実施概要

開催日：令和4年10月2日（日）

開催場所：京都大学防災研究所（宇治キャンパス黄檗プラザ）

参加者数：80名（所外75名、所内5名）

2. 目的

日本災害復興学会が毎年開催する年次大会に合わせて、「災害復興研究におけるフロンティア」をテーマにし、学会内外から特別ゲストを迎えてスペシャルトーク・セッションを実施した。具体的には「若者の語りのカタチと支える人：阪神・淡路大震災から28年、東日本大震災から12年」をテーマにした。

そもそも、災害を体験した人々の語りの内容や、経時的な語りの変容を研究することは、災害から人々や社会が回復する過程を明らかにするうえで重要である。特に、東日本大震災の直後から、被災した中学生、高校生、大学生らが、自身の被災体験を、被災地外の学校や地域、国内外のシンポジウムなどで語るといことが行われるようになっている。また、若い語り部を対象としたヒアリングでは、東日本大震災を小学校低学年で経験した人が「子どものころには理解できなかった体験を、大人になるにつれて言語化できるようになる」と話したように、災害を体験した子ども・若者は、成長過程で独特の葛藤を感じ、時に立ち止まり、時に前へと進み、時に周囲の寄り添いに支えられる。

このような若者の語り部とそれを支える大人という構図は、東日本大震災の直後より見られてきたわけだが、これは比較的新しい現象と言える。なぜなら、阪神・淡路大震災を体験した当時の子どもや若者たちの語り部活動が知られるようになったのは、震災から10年以上が経過して以降である。そして、阪神・淡路大震災を語り継ぐ若い語り部も、これまでに語ることへの葛藤や周囲の支えを表明している。

そこで、本特定研究集会では、阪神・淡路大震災と東日本大震災を体験し、その体験を伝えている若い語り部と、その若者に寄り添った大人を招き、若者の語りのカタチを考えることを目的とした。

3. プログラム

開催日時：令和4年10月2日 13:30 ～ 16:00

時間	内容
13:30- 13:35	本研究集会の目的（京都大学防災研究所 中野元太）
13:35- 14:00	基調講演「若者の「語り」が持つ二つの意味を考える」 諏訪清二氏
14:00- 14:30	対談①：中村翼氏×船木伸江氏

14:30- 15:00	対談②：菊池のどか氏×永沼悠斗氏
15:00- 15:10	休憩
15:10- 16:00	パネルディスカッション コーディネーター：諏訪清二氏 パネリスト：中村翼氏、船木伸江氏、菊池のどか氏、永沼悠斗氏

4. 登壇者略歴

諏訪清二氏：舞子高校環境防災科で防災教育をスタート。災害を生き延びる方法にとどまらず、災害ボランティア、災害体験の語り継ぎなど、防災教育の幅を広げて子供たち、教職員、防災教育関係者を対象に活動を継続中。中国、ネパール、スリランカ、トルコ、モンゴルなど海外での活動も豊富。防災教育学会会長、兵庫県立大学客員教授（減災復興政策研究科）など。

中村翼氏：1995年1月17日、神戸市兵庫区生まれ。「語り部 kobe1995」メンバー。阪神淡路大震災が発生した午前5時46分の約12時間後の午後6時21分、三宮の上田病院にて誕生。神戸市立明親小学校入学後、小学5年生の時に父親の転勤により岐阜県へ移住し、中学3年生まで過ごし、再び神戸へ。神戸市立須佐野中学校卒業後、県立神戸北高校から神戸学院大学に進学し、現在に至る。現在は、兵庫県内で会社員として過ごす。

船木伸江氏：神戸学院大学現代社会学部・社会防災学科・教授。京都大学大学院 情報学研究科博士後期課程（単位取得退学）、2006年に神戸学院大学へ着任。学際教育機構 防災・社会貢献ユニット専任講師、人文学部、現代社会学部准教授を経て2021年から現職。研究テーマは、「防災教育」。学校における防災教育の現状と課題 新たな防災教育ツールの開発、災害経験者の語り継ぎに関する研究に取り組む。兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会の学校防災アドバイザーも務める。

菊池のどか氏：岩手県釜石市出身。釜石東中学校で、中学2年生から体験型の防災教育を受ける。防災担当の整美委員会委員長として、地域美化活動や防災活動に取り組んだ。卒業間近の3月11日に東日本大震災が起こり、隣接する鶴住居小学生の児童とともに避難した。被災後、釜石高校に入学。釜石東中学校の避難についての取材を受けたことがきっかけで、語り部と呼ばれるようになった。岩手県立大学卒業後、かまいしDMCに入社し、いのちをつなぐ未来館（震災伝承施設）に配属となった。震災時の経験のガイドや、防災に関する展示などを製作する職に就いた。2021年5月からは、株式会社8kurasuに入社し、語り部やガイドを続けながら、防災のワークショップ等の企画運営を行った。現在はフリーランスとして語り部を行っている。

永沼悠斗氏：大川伝承の会。宮城県石巻市出身・在住。3.11当時は高校生。2014年より大

川伝承の会で語り部活動を開始、「失われた街」模型復元プロジェクト記憶の街ワークショップ in 大川地区 実行委員を務める。3.11 メモリアルネットワーク「若者プロジェクト」メンバーとして、若手語り部の連携やメディアと取材対象との対話機会創出に尽力。

5. 研究集会における議論

ここでは、研究集会の内容を、語られた印象的なエピソードとともに、2つの点に分けてまとめたい。

(1) 支える大人の葛藤

諏訪氏は、2002年に設置された兵庫県立舞子高校環境防災科の科長として、防災教育を実践してきた元・高校教諭である。当時、入学してくる高校生らは、阪神・淡路大震災を小学生の頃に体験していて、講演では、「あの子はお母ちゃん亡くした子やねとか、この子は母子家庭で、おばあちゃん子でおばあちゃん亡くしたとか、この子は鹿児島に1ヶ月、2ヶ月避難してたよねとか、そんな子が何人かクラスにいて、そこで付け焼き刃の防災知識で勝負してもこれは負けるわっていうのが初日に悟りまして、でそこから考えたのが子ども達に本物に出会う場を作ろう」ということだったと話している。

そこで、NPO関係者、大学教員、消防士など、震災当時に第一線で対応に当たった人を外部講師として、授業に呼ぶことにした。しかし、諏訪氏は、外部講師や大人が「君たちあの頃、震災の時おいくつ？あぁ、幼稚園か、じゃあ覚えてないよね。」と言われたことに「子どもの体験を丸ごとなかったことにしてしまうような大人たちの存在が非常に気になった」と話している。当時3歳であった子どもも当時のことを記憶し、震災当日に生まれた中村氏も直接震災を体験していないけれども、震災体験とともに生きてきている。だから、諏訪氏は、環境防災科の生徒らに幼い頃に体験した震災体験を高校生の言葉で綴ってもらう「語り継ぐ」という手記をつくりはじめた。この「語り継ぐ」を媒体として、諏訪氏は「覚えていないよね」と、なかったことにされてきた子どもの記憶を伝え、これまでも若者が震災を語ることに寄り添ってきている。

中村氏は船木氏が教員を務める大学に通っていた。ちょうど震災から20年を迎えたころだったと言い、中村氏が震災の取材を受ける機会があった。震災当日に生まれ、本来、誕生日という周囲から祝福される日に、周囲は追悼しているという、そのギャップによって、ずっと自らの誕生日を受け入れられずにいた。船木氏も、中村氏にどのように声をかけたらいいのか、どうサポートすればいいのか悩んだという。一つの契機となったのは、船木氏も深くかかわる語り部 kobe1995 という団体のメンバーに中村氏を紹介したことにある。語り部 kobe1995 は震災の語り部グループであり、船木氏は「そういう方々にも、ちょっとうちのゼミに震災当日で生まれた子がいるんだ。語り部さんも彼（中村氏）にも会いたいであつたり、話をしてほしいっていうふうな声掛けをしてくださった」と当時を振り返り、「私たちが中村氏を支える中では色んな人たちがチームで、仲間にも相談しながら、みんなで語り部

活動しながら、またその相談も受けながら」中村氏を語り部全員で支え、また互いに支え合っていることを報告している。これらのことは、若者の語り部を支える立場にある諏訪氏や船木氏も、若者との向かい方に葛藤し、工夫しながら、若者の語りを創出する存在であったことがわかる。

（２）社会的に形作られる語りへの違和感

登壇してくれた語り部から表明されたのは、自らの語りと社会的に形作られる語りとのギャップである。たとえば、中村氏は、震災当日に生まれた「奇跡の子」として、幼いころから１月１７日になるとメディアからの取材を受けてきた。当時は、なぜ自分の誕生日に取材が来るのかわからなかったと話しており、「１月１７日っていうのは「震災の日」ではなく「自分の誕生日」という認識だけでした。なので世間は１月１７日は震災っていうふうに報道されてるんですけども、僕の心の中では誕生日って認識だけでした。なので、中学生になっても自分が震災の日に生まれたということに自覚がなかったので、自分の心の中と、メディアでのこの受け取り方の違いっていうのがここで差が生まれてるような状況です」と話している。

同様のギャップは、菊池氏や永沼氏の話にも通じていた。語り部として自らの言葉で伝えようとしたことと、それを報道した人との大きなギャップである。たとえば菊池氏は釜石東中学校で防災教育を受け、世間的には「釜石の奇跡」として知られる成功した避難行動の当事者である。小学生と中学生が手を繋いで山に向かって避難している「奇跡」の瞬間を写した写真を使いながら、一般的に伝えられる奇跡とは裏腹に、車の大渋滞で避難できないという焦り、保護者の叫び声、車の人たちが「邪魔だ、どけ」という、当時のリアルな状況を菊池氏は話してくれた。そして、それが奇跡の場面として世に伝わることの強烈な違和感を表明した。

ここで示してきたように、若者の語りを支える人も、そして震災を語る若者自身も、それぞれが違和感や葛藤を抱えながらも、震災体験を伝えている。この研究集会で示されたのは、若者の語りを、語り単体として理解することはできないということである。常に、若者の語り部とそれを支える大人やギャップを生むメディアを含め様々な周囲の人々との関係性によって語りが形成され、変容するということである。若者の語り部の語りのカタチに丁寧に寄り添って明らかにしていくことが、災害復興研究のフロンティアになりうる。

添付資料

資料①特定研究集会チラシ



参加のお申し込みはこちらまで

対面開催
(オンライン
配信あり)

日本災害復興学会 公開シンポジウム

若者の語りのカタチと支える人

阪神・淡路大震災から28年
東日本大震災から12年

2022年10月2日（日）13時30分～16時00分
京都大学宇治キャンパス きはだホール
(京都府宇治市五ヶ庄)
JR黄葉駅・京阪黄葉駅より徒歩6分

基調講演



若者の「語り」が持つ二つの意味を考える
諏訪清二
兵庫県立大学客員教授

対談：若者語り部と支える人



阪神・淡路大震災 若者語り部
中村翼
震災当日生まれ 語り部kobe1995メンバー



阪神・淡路大震災 支える人
船木伸江
神戸学院大学現代社会学部教授



東日本大震災 若者語り部
菊池のどか
震災当時 釜石東中学校3年生



東日本大震災 支える人
永沼悠斗
大川伝承の会・3.11メモリアルネットワーク

パネル「若者の語りのカタチと復興」

ディスカッション

本事業は日本災害復興学会および京都大学防災研究所特定研究集会「災害復興研究におけるスペシャルトーク・セッション」の支援を受けて実施しています。

主催：日本災害復興学会・京都大会実行委員会

資料②研究集会の会場の様子

